HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	神社合祀に反対する博物学者としての熊楠の視点
Author(s)	揚妻, 直樹
Citation	熊楠works, 53, 31-35
Issue Date	2019-04-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74817
Type	journal article
File Information	kumagusu_works2019_53_31_35.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

熊楠ワークス 53: 31-35 (2019)

神社合祀に反対する博物学者としての熊楠の視点

北海道大学准教授　揚妻　直樹

私は 2018 年春まで足掛け 11 年、南紀・古座川源流部の平井という小さな集落に住んでいました。そのこともあって、松居先生には南方熊楠のシンポジウムで何か話をしてくれないかと依頼されておりました。たいして熊楠のことを知っているわけでもない私がこの依頼を受けてよいものか、かなり迷いました。でも、松居先生からは、それは気にせず、熊楠について少しでも関連した内容であれば何でもよいと言っていただきましたので、今回の講演をお引き受けすることにしました。ですが昨日、熊楠研究会での皆さんの発表や議論、そして夕食の際にもさまざまなお話しを聞かせていただき、皆さんの熊楠に対する熱い思いを知って、この講演を安易に引き受けたことを少し後悔しているところです。

熊楠についてあまり知らなかったとはいえ、さすがに 10 年も南紀で暮らしていると熊楠の情報は周囲から入ってきました。そのうち、彼が英国から帰国後、神社合祀反対運動に身を投じていった様子を知りました。私にはその理由について、彼の宗教的、民俗学的な視点からは理解できるものがありました。神社の森を守ることについても、神道の考え方からすれば、森自体が神性を帯びている、あるいは神の依代としての意味あいから、やはり守る必然性があったのでしょう。その一方で、エコロジーを日本に広めたとされる熊楠が博物学者というか生物学者として、どのようなモチベーションで神社合祀に頑強に反対していたのか今ひとつ腑に落ちず、何年もモヤモヤしていました。

話は全く変わりますが、私の専門分野は哺乳類の生態学です。野生のシカやサルを主な研究対象としてきました。森の中で動物がどう暮らしているのか、ただ知りたいだけで調査をしていました。しかし、人間社会にとっては彼らは農業や林業に被害を与える、いわゆる迷惑生物であり、管理し、駆逐すべき存在とみなされています。どうして動物が農林業に被害を出すようになったのか一般的にいわれている原因は、彼らが不自然で異常に増えすぎたからというものです。和歌山県の資料を見ると、確かにサルによる農業被害はここ 30 年くらいで増えてきたようです。県下のシカの分布もこの 40 年くらいで拡大しています。シカについては農林業被害だけではなく、自然植生を荒らし、生態系に被害を与えていると言われるようにもなっています。植物学の大御所先生がたは、「自分らが若い頃は森で調査をしていても一匹もシカに会わなかったのに、今はしょっちゅう出会う、自然に異変が起きている」というような話をしばしばされます。でも実は、こうした認識はせいぜい遡っても 5～60 年前と比較して、農林業被害が増えた、あるいは森の雰囲気が変わったことを元にしているにすぎません。その程度の期間の変化だけで、現状が不自然で異常

だと判断しているのです。それでも、なぜか「本来の日本の生態系には野生動物がとても少ない」ことが暗黙の前提となり、生態系保全や野生動物管理が進められてきました。でも、ちょっと考えてみて下さい。自然生態系というスケールの大きなものを相手にするのに、たかだか 5～60 年間だけ考慮するのは、あまりにも視野が狭すぎるでしょう。そこで、私は日本にどのくらい動物が居たか確かめるために、今から 70 年以上前の動物の生息状況を調べ始めました。これから暫く熊楠の話は出てきません。ですが、今から 70 年以上前というと、熊楠が生きていた時代と重なりますので、後々、彼の話と繋がってきます。しばらくこの話にお付き合いください。

過去の野生動物の生息状況がどうだったか？結論からいいますと、意外にも非常に多くの動物たちが日本国中に生息していたことが明らかになってきました。例えばシカは、もともと各地にかなりたくさん居たことが過去の狩猟記録や分布域などからわかります。ところが、彼らはいったん激減し、最近になって回復していたのです。このような個体数の激しい変化が、北海道から鹿児島にいたる全国各地で起きていました。

まず、私は北海道のエゾシカが本来どのくらい生息していたか推定してみました。今年は「北海道」という名前が命名されて 150 年に当たりますが、その頃の生息数を当時の狩猟数から割り出してみました。すると、1870 年ころまで北海道にシカは 50～70 万頭程度は生息しており、90 万頭近くいた可能性が示されました。近年、増えすぎと言われているエゾシカの数は 50～60 万頭ですから、もともとと比べれば決して多いとはいえません。

シカが異常増加したとされる原因として、天敵であるオオカミを絶滅させたからとよくいわれます。この説は研究者にも一般の方にも広く信じられています。ところが、150 年前、北海道にシカが大量にいた頃、オオカミと一緒に暮らしていたのです。つまり、オオカミがいても、シカが少ないわけではないのです。環境問題では何かと地球温暖化が原因といわれます。動物の増えすぎについても、温暖化により冬が暖かくなって動物が冬越ししやすくなったのが原因ともいわれてきました。しかし、現実には温暖化する前に、むしろ大量のシカが生息していたのです。このように、野生動物の増えすぎの原因としてよく挙げられるオオカミ絶滅や温暖化は必ずしも当たらないことが明らかになりました。たくさんいたエゾシカもその後、激減してしまい、約一世紀もの間、極めて少ない状態が続きました。ようやく 1990 年代になり、生息数が回復してきたものの、現状は元に戻ったか、まだ戻りきっていないかというレベルといえるでしょう。

日本におけるシカの自然分布の南限は鹿児島県の屋久島です。屋久島でもシカの増えすぎが問題視されています。このヤクシカについても、私は過去の生息状態を調べてみました。いろいろな文献や調査報告、捕獲記録などから、今から 70 年以上前は、現在と同程度かそれ以上に多くのヤクシカが生息していたと考えられました。宮之浦という島で一番大きな集落の中にさえ一年に何十頭もシカが飛び込んできたそうですから、今ではとても考えられない状況だったようです。ところが、それだ

け多かったシカも 5〜60 年前に激減してしまいます。そして、2000 年頃から回復し始めました。過去の状況からすれば、元に戻っただけなのですが、このシカ個体数の回復は不自然な増えすぎと見なされ、行政はシカの数を半分未満に減らす計画を実行しています。しかし、70 年前の記録にあるように大きな集落にシカがしょっちゅう飛び込んできたり、海をバシャバシャ泳ぐほどの状況には今でもなっていません。

紀伊半島に目を向けてみましょう。紀伊半島にはあちこちにシシ垣があったことをご存知の方は多いでしょう。最近までシシ垣普請をしていたところもあったそうです。シシ垣を作り、維持するのは相当大変だったはずです。裏を返せば、それだけの苦労をしてでもシカやイノシシを防がねばならないほど被害が激しかったといえます。今でこそイノシシやシカの被害は夜間に起きることが多いのですが、江戸期の紀伊半島の古文書には、真っ昼間でも動物がたくさん出てきて農地を荒らすので、その対応のため他の作業ができないと記されています。シシ垣を作るにも、資金が足らず紀州藩に借金を申し込むこともあったそうです。

中型から大型動物の林業被害は、全国的にこの 30 年くらいで急増しており、やはり異常な状況と考えられています。ところが、古くから林業が営まれていた吉野地域の林業指南書、森庄一郎著「吉野林業全書」には意外なことが書いてあります。出版年は 1898 年なので、熊楠の時代です。そこには「獣害も何れの地も之なきはなし」、つまり、動物による林業被害はそこら中どこでも発生するとあります。被害を出していた動物種もシカやイノシシなど今と全く同じです。この指南書には被害対策方法も描かれています。まず、現在も使われている防獣柵の設置です。また、植林木の幹には帯状のものを螺旋に巻きつけています。これは樹皮剥ぎを防ぐためのもので、現在のテープ巻という手法です。さらに、小枝を使って稚樹を守っていますが、これはツリーシェルターと基本的に同じものと考えられます。私は 100 年以上も昔と現代の対処法が全く同じだったことに愕然としました。林業の被害対策技術はほとんど進歩していないようなのです。この林業指南書は、動物による林業被害はこの 30 年で始まったような異常事態ではなく、ずっと昔から普通に起きていたことを示しています。

南紀には大塔山というシンボリックな山があります。野鳥の会の村上和潔氏がこの大塔山を鳥獣保護区に指定する活動をされていました。その過程でさまざまな野生動物の生息状況の変化をまとめています。それによれば、今から 6〜70 年前まで、おそらく熊楠がまだ存命だった頃も、大塔山系にはシカやイノシシが多くいたとされています。しかし、その 10 年後、20 年後とどんどん動物が減っていきました。かつてはたくさんいた動物たちは、今から 50 年前には非常に少なくなってしまったそうです。この地域で動物たちが回復し始めるのは 2000 年頃からだと私は推測しています。

全国各地の野生動物の過去の生息状況を調べてわかったことは、「本来の日本の生態系には野生動物がとても少ない」というのは単なる思い込みに過ぎず、逆に動物

はかなり多くいるのが、当たり前だったということでした。たまたま 50～60 年前は日本中で動物が激減していて、その後の回復期しか知らない人にとっては、今は動物が異常に多いと感じてしまうというわけです。でも、そんな個人的な感覚で異常や正常、不自然や自然を決めてしまうのは適切ではありません。

ところで、なぜたくさんいた動物が一旦激減し、なぜ最近になって回復し始めたのかという疑問が湧いてきます。さらに、各地に住んでいる高齢の方々に、子供の頃に動物をよく見ましたかと伺うと、皆さん、おしなべて、あまり見なかったと答えます。当時はまだ動物がたくさんいたはずの地域の方でもそうおっしゃります。動物がたくさんいたのに、ほとんど見かけなかった、というのはちょっとしたミステリーです。このミステリーは、動物だけを見ていても解けません。動物が棲む自然が人間の関わり合いの中でどう変遷してきたのかにまで視野を広げる必要がありました。

ここからは、里山と奥山とを分けて考えていきます。今、里山の保全活動が流行です。高校の教科書などでも、里山とは人間と自然の調和によって維持されてきた、自然豊かな生物多様性の宝庫で、守るべき文化的遺産である、というように解説されています。でも、それが本当の里山の姿なのでしょうか？もし、そんなに自然が豊かなら、当然ながら動物もたくさん棲むことができます。それなら、かつて人々はしょっちゅう動物と出会っていたはずで、現地での聞き取り情報と矛盾します。

過去の里山について調べてみると、既に 1956 年出版の千葉徳爾著「はげ山の研究」でほぼ全容が明らかにされていたことがわかりました。それ以降の研究やさまざまな資料の情報を総合すると、実際の里山と、現在流布している里山のイメージは真逆であることが明らかになりました。例えば、江戸時代末期の和歌山の農村と里山を描いた「蜜柑山図」（和歌山県立博物館蔵）という絵画あります。そこには、家の前に田んぼがあり、後ろに蜜柑の畑があり、でも、その周辺の山々にはマツが何本か生えているだけで、ハゲ山が広がっています。那智勝浦町の海岸に剣岩という岩があります。かつて名勝とされ絵葉書にも使われていました。和歌山出身の歴史学者、西岡虎之助は 1920 年代にこの剣岩の絵を描いていました。そこで、私は彼が絵筆をとった場所を探してみました。絵のアングルを考えて場所を特定すると、そこからは照葉樹林の密林に視界が阻まれて、剣岩をまともに見ることができません。木によじ登ってようやく剣岩を確認しました（図１）。つまり、今でこそ、そこは生物多様性の宝庫になっていますが、西岡が絵を描いた当時、周囲にはほとんど木がなく眺望が開けていたのです。これら蜜柑山や剣岩が描かれた時代は熊楠の時代と一致しています。私が住んでいた古座川源流部の平井集落周辺の昔と今を航空写真（国土地理院資料）で見比べてみました。今は集落周辺のほとんどが森に覆われていますが、60 年前は高い木のないハゲ山が多かったことがわかりました。

このように、かつての里山はハゲ山や疎林が広がる生物多様性が極めて乏しい環境でした。そんな不毛な土地に野生動物はまともに暮らすことはできなかったはずです。それが、そこに暮らしていた人々があまり動物に出遭わなかった理由といえ

るでしょう。こんな里山の状態はおそらく 1960 年代（今から 50～60 年前）まで続いていたと考えられます。

図 1　西岡虎之助が 1920 年代に那智勝浦町の剣岩を描いた地点から見た風景。2012 年に木に登って撮影。西岡の絵はニュース和歌山株式会社のホームページに掲載されている。
http://www.nwn.jp/old/kakokizi2011/20110813/23/23.html

　それでは、奥山はどうだったでしょうか？当時、野生動物の被害は少なくなかったわけですから、その生息数は多かったことになります。奥山でも昔から伐採が行われ原生林は少なかったとの指摘もあります。しかし、林業の統計を見る限り、大規模な森林伐採が行なわれていたのは戦中から 1970 年頃まで（今から 50～60 年前）でした（図２）。なんとその時期のたった 30 年間で、日本の森林面積の 8 割が皆伐された計算になります。さすがに生息地の 8 割が短期間に破壊されれば、動物は激減してしまうでしょう。和歌山県の植生図では、山間部の大半が自然林の皆伐の後に造られたスギ、ヒノキの植林地になっています。こうした植林地は拡大造林政策によって一気に増えたものと思われます。私が勤務していた古座川町・平井の北海道大学和歌山研究林は 1925 年に民有林を購入して設置されました。全部で 430 ヘ

クタールの森林のうち、当時の植林地は１割程度に過ぎません。その後、おそらく周囲の山林と歩調をあわせるように皆伐と植林（拡大造林）が進み、現在は面積の7～8割が植林地となっています。

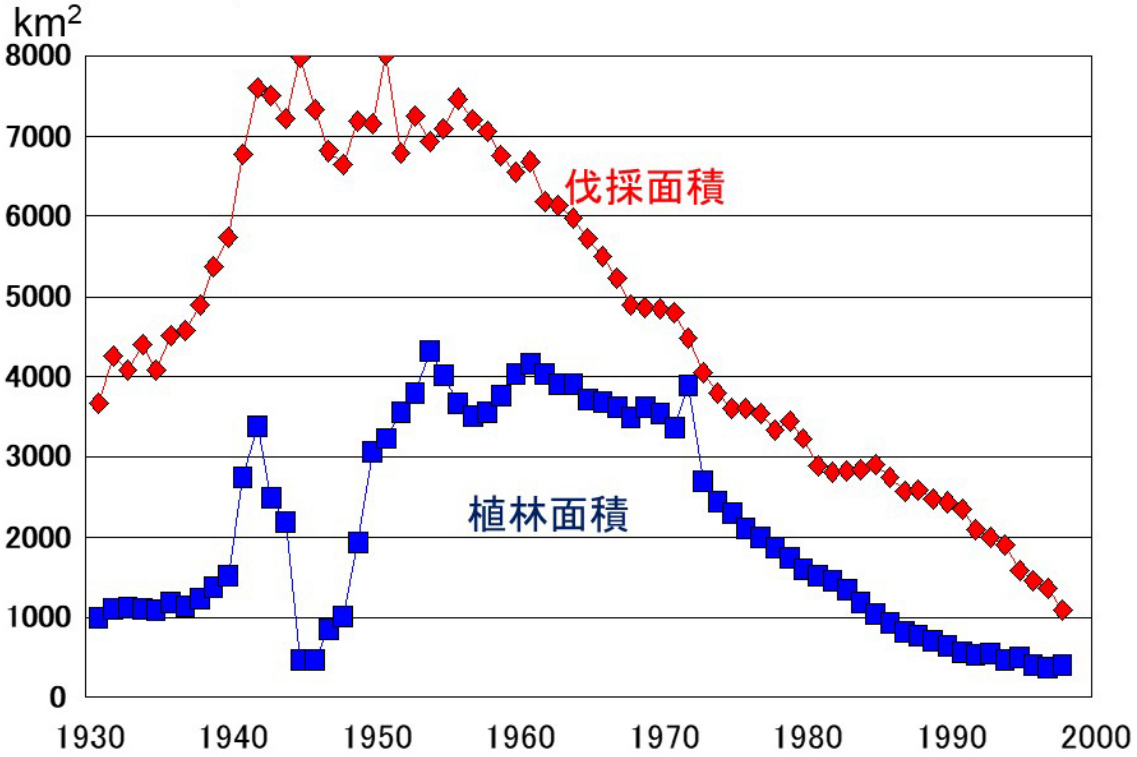

図２　日本の森林伐採面積と植林地面積の推移。森林文化協会が林業統計要覧をもとに作成したデータを元に作成。https://www.shinrinbunka.com/datatable/2-1-02.html

野生動物の生息地は人間活動との関係でどう変遷してきたのか見てみましょう（図３）。里山では薪炭の採取、肥料として落ち葉や小枝の採取など、人々の日々の暮らしのため、ハゲ山が広がっていました。落ち葉を取りさると地力が衰えしまい、マツ林などの痩せた林になってしまいます。花粉分析によれば、近畿地方では稲作が始まった４世紀ころからマツが急に増えだしており、そのころから里山のハゲ山化が始まったと指摘されています。そのようにして無立木地、疎林、痩せた林と化した里山に、動物は棲むことができなくなっていきました。このハゲ山は人口の増加にあわせて拡大してきたと考えられます。それでも、里から離れた場所には森が残り、多くの野生動物が棲むことができていました。ところが、戦中から拡大造林期までに、森林のほとんどが皆伐され、その半分がスギ・ヒノキの植林地に改変されました。スギやヒノキの林は野生動物にとっての生産性が低い、棲みづらい場所であることがわかっています。一方、戦後になると化石燃料が普及し、里山では薪炭採取が急速に減りました。さらに化学肥料が使われ始めると、里山から落ち葉も収集されなくなり、里山の地力が回復していきます。それでも、里山がすぐには動

物が棲めるほどの環境にはなりません。その結果、今から 5～60 年前は（燃料革命・肥料革命・拡大造林政策）、野生動物は里山には棲めず、奥山の生息地も破壊されて、日本中で激減していたのです。

それでは、現在の状況を考えてみましょう。森林伐採を行った跡地の半分は植林されましたが、残りの半分は放置されました。数十年が経った今、そこには自然林が再生し、動物にとっての生産性も回復したため、彼らがまた棲めるようになってきました。一方、かつてハゲ山だった里山は豊かな森林に生まれかわり、動物が棲めるようになりました。そこは人間の生活圏のそばなので、人と動物がよく出遭うようになったわけです。さらに、農地に隣接しているため、農業被害も発生しやすくなりました。動物による農業被害の防除が難しいのは、この環境構造が一番大きな理由といえます。和歌山県の植生図では、照葉樹林の二次林が農地周辺に多いことが示されています。その二次林のほとんどは、元はハゲ山や疎林だったと私は想像しています。

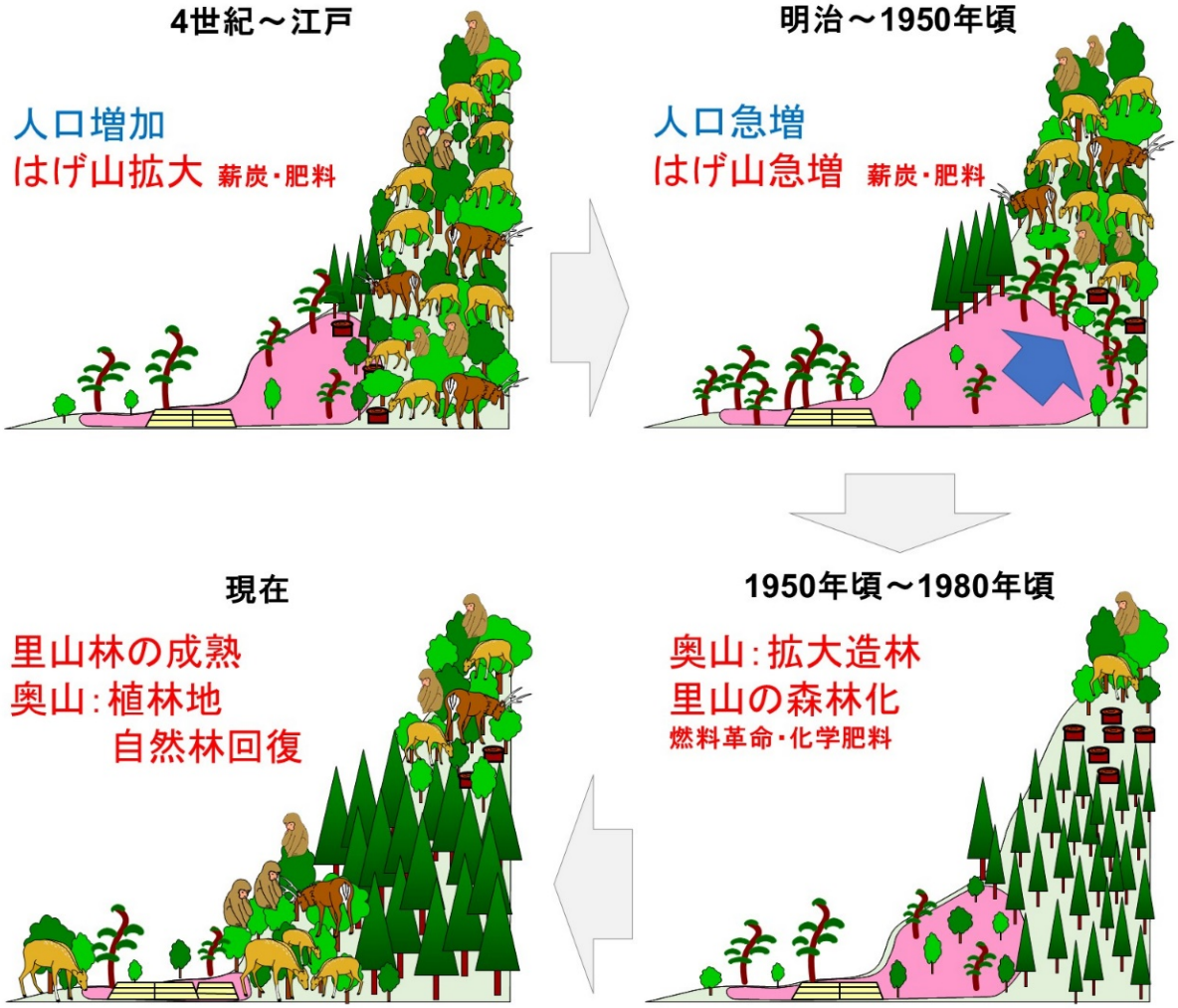

図 3　人間活動により変化し続けてきた野生動物の生息地としての里山と奥山。揚妻―柳原(2014)を元に改変。

以上をまとめてみます。稲作が始まって以来、人口増加によるハゲ山の拡大で野生動物の生息地はどんどん狭められていきました。それでも、奥山には非常に多くの動物が棲むことができていました。ところが、拡大造林期までに、奥山の生息地のほとんどが破壊されます。その結果、今から 50～60 年前は、過去数万年の日本の歴史の中で最も野生動物が少ない異常な時期だったと私は推測しています。その時期を基準にすれば、今は動物が非常に多くて、不自然に感じてしまいます。でも、そんな特殊な時期を基準に本来の生態系の姿を考えるのは妥当ではありません。今の自然の状態を評価するには、野生動物が激減する以前の、動物がたくさんいた時期との比較が不可欠なのです。

動物が異常になっているとよく言われてきました。しかし、過去からの動物と環境の変遷を知ると、彼らはただ普通に振舞っているだけだったことがわかります。彼らにとっての食物や住処などの資源が増えれば個体数が増え、資源が減れば個体数を減らすだけです。彼らは人間が作り出し、絶えず改変させてきた環境になんとか合わせて、ごく自然に生きてきただけでした。このことを何本かの論文にまとめ、いくつか一般向けの本や雑誌に記事を載せ、また何度かシンポジウムでお話したことで、私の中では野生動物にまつわる一連の問題やミステリーについて一段落つけることができました。でも、この話が熊楠の神社合祀反対の話と繋がってくるとは思ってもみませんでした。

私は南紀に住んでいたので、紀伊半島の面白そうな場所を色々と巡っていました。その中には熊楠に関連する場所もあり、白浜の南方熊楠記念館や那智原始林なども訪問していました。ただ、田辺に熊楠顕彰館があることは知っていましたが、なかなかタイミングが合わず、実際に訪問できたのは数年前のことです。そこに大山神社の写真が展示されていました（図４）。この写真を見た瞬間に、神社合祀に反対した生物学者としての彼の気持ちがわかったように感じられました。この写真には神社とその周りの神社林が写っていますが、その裏山はハゲ山です。植物が生えている部分もありますが、丈が短い藪のようです。まともな林は神社のほんの周りにしかありません。熊楠研究でよく取り上げられる田中神社の写真でも似たような神社林が写っていますが、その後ろ一帯にはあまり良い林がないように見えます。つまり、熊楠の時代には、守るべき低地の自然は神社林しかなかったのです。こういった場所を生態学者はレフュージア（生き物の逃避地）と呼んだりします。自然と呼べそうな場所は神社林しか残されていないなら、そこを守るしかないと熊楠が考えたことは、生物の研究者としてよく理解できます。先ほどの畔上先生のお話では、神社林を構成する植生はそれほど自然なものではなかったという指摘がありました。それでも、神社にしか樹高の高い林がない状況では、何とかそこを死守する以外なかったのだと思います。

図４　大山神社の写真。南方熊楠顕彰館所蔵（関連 0827）。

私は熊楠が神社合祀反対運動を通して後の世に残した影響について、野生動物の観点から考えてみました。熊楠や柳田国男は、田中神社などの神社林を、わが国の自然の特長で非常に優れた景観だと位置づけています。本人たちの意図がどうであったかは別として、こうした熊楠や柳田の言葉が、多くの人々に田中神社のような神社林が原生的自然であり、日本の本来の自然環境を表しているという認識を広める一因になったと言えるでしょう。ですが、あんな狭い林に中型から大型の野生動物が棲むことは不可能です。熊楠は神島についても、その自然を高く評価していますが、やはり周囲が海に囲まれた小島に大きな動物が棲むことは困難です。つまり、熊楠や柳田は動物も棲めないような林をわが国の特長的な優れた景観と評価したわけです。そんな不完全な自然をそのように評するのは、私からすれば見識が偏っていると言わざるを得ません。

私は熊楠の興味が野生動物に対して非常に希薄だと感じています。彼が書いた「十二支考」には日本の野生動物として兎・猴・猪が出てきます。ところが、その記述のほとんどが伝聞や文献から拾ってきたものに過ぎません。もちろん、民俗学的な内容ですから伝聞や文献情報が多くなるのは仕方ないのかもしれません。それでも、生物学者として多少なりとも動物を見ていれば、動物にまつわるさまざまな話について、自分の観察経験と結びつけて解説したはずです。例えば、この動物でこうした逸話が生まれたのは、自分が観察したあの行動が元になっているだろう、などという記述があってしかるべきです。それはもう、生物学者の性として出てきてしま

うはずです。しかし、そういった実体験に基づく記述が「十二支考」にほとんどなく、自分の周りでは猿をなかなか見ることができない、という程度に留まっています。恐らく、彼は野生動物に接した経験が乏しいようなのです。

先に紹介したとおり、彼の時代でも、行くところに行けば、住んでいる人が困るほど多くの野生動物がいました。そう考えると、彼は動物が多く生息していた場所であまり調査をしてなかったのかもしません。彼が調査に入った場所を地図などに集約してみれば、そのあたりを検討できると思われます。いずれにせよ、彼の自然観には野生動物の存在が欠落しているようです。そのため、野生動物が棲めないような林を日本の生態系の典型と位置付けてしまったのでしょう。さらに不幸なことに、彼の考えに影響を受けた人々が、神社林のような動物がいない自然こそ守るべき原生自然なのだという認識を広めてしまった可能性があります。その影響は、彼の死後 80 年近くたった現在でも尾を引き、自然生態系や生物多様性の正しい理解に悪影響を及ぼしているように感じられます。熊楠が今の世に遺した功績は多々あることに間違いはありません。その一方で、このような負の遺産もあるのかもしれません。彼の残した功罪について、今後より深く研究が進むことに期待したいと思います。

（付記）本稿はシンポジウムでの発表内容を元に、論旨を解りやすくするために改稿したものです。